

『激情と神秘——ルネ・シャールの詩と思想』

西永良成著

岩波書店 二〇〇六年一月

詩は感情の言語化であるにもかかわらず、表現の対象となる感情が生々しさのなかで沸騰しているさ中ではなく、時間的な距離を置くことでそれが沈静した段階でうたうことによつて、成熟した詩がもたらされると述べたのはワーズワースであったが、それは芸術表現の対象となるものが、現実世界の文脈のなかに置かれた感情ではなく、そこから一旦切り離された「想像上の感情」であるとするS・K・ランガーらによる近代芸術学の理論によつてもあとづけられる。ワーズワースの信奉者であった島崎藤村が、青年期の情念的な経験を、仙台への流離による沈静化を経てうたい出しことはその典型的な一例であろう。

西永良成氏の名著『激情と神秘——ルネ・シャールの詩と思想』を読んで第一に抱かされたのは、こうした詩の生成に関する一般的な言説への疑念であった。著作の表題が明示しているように、西永氏の捉えるルネ・シャールは、「激情」に動かされて詩と政治の世界に入り込み、活動した人間であり、にもかかわらず詩作においてはその「激情」をそのまま言葉に写し取

るのではなく、厳密な表象の論理のなかで言葉の彫琢がおこなわれ、その結果難解と晦渋をはらんだ「神秘」の様相を呈する作品群がもたらされることになった表現者であった。もちろんフランス文学の専門家ではない筆者は、西永氏の著書に接するまでルネ・シャールに対する認識は持ち合わせておらず、泥縄式に詩集に眼を通した上で、氏の周到を極めた叙述のなかに浮び上がってくる詩人の像を追つたにすぎない。シャールと同時代人であるサルトルやカミュがそうであったように、フランスの文学者が政治活動への関与を保ちつつ表現者としての営為をおこなうことは珍しくないが、シャールの特性は、彼がアクチュアルな現実の事象に強い関心と参与の姿勢を示しながら、それを詩作に生な形で直結させず、作品自体は晦渋な言葉遣いのなかに成り立つことであつた。それはもつぱら彼が青年期に持ったシュールレアリスム運動への関与の所産であり、ブルトンやアラゴンらとの交わりから蒙つた影響が、シャールの詩の基底をなすことになる。シャールのシュールレアリストとしての活動は二〇代に限定されるものの、詩があくまでも言葉の構築物としての自律性を持ち、生の現実世界に帰属しないという詩作の意識はそこで培われ、シャールの詩人としての個性を明確化したようである。

本書の構成においては、「シャールの詩作(一)」の章でシャールの幼少年期の軌跡が辿られた後、シュールレアリスム運動との関わりが考察され、さらに「シャールの詩作(二)」の章では、シュールレアリスムを離れた後のシャールの、レジスタンス運動への参加をはじめとする政治活動と、それと「共存」する、その詩世界の独自の深化が検討されていく。両者の「共

存」という言葉が使われているように、シャルルにおいては現実世界の奔流のなかに身を置くことと、そこで喚起された情動が詩的な言語へと転化されることとの間にさほどの時空の径庭はなく、あたかも詩人が「現実的感情」を「想像的感情」へと変換される機構をその内に備えていたかのように見える。実際シャルルはそうした機構の持ち主だったようであり、そこから社会現実に対する眼差しの強さと峻別される形で屹立する、作品の「神秘」の深さと晦渋さがもたらされてくることになる。けれども興味深いのは、「解説的、弁解的な冗長な言葉を可能な限り「剪定」し、簡潔、凝縮、すなわち詩的負荷を最大の強度 (intense) にまで高めるシャルルの書法」に対して、西永氏がつねに合理的ともいえる「解釈」を施そうとしていることで、たとえば今の箇所について引用された「浪費家の松明」という詩の「隔離された囲いが焼き払われると／雲よ、おまえが前にでる」というパラグラフの「隔離された囲い」とは「社会に背を向けた作家が閉じこもる主観的で感傷的な美の領域」を指し、後の行はそれが「焼き払われ」ることによつてもたらされる、「精神の未知の冒険、抵抗もしくは孤高」を意味するとされる。

こうした解釈は象徴というよりも寓意の領域に帰属する性格を強く帯びているが、寓意とは作者の意識において確立されたある種の変換式が現実の事象を取り込みつつ、それに応じた表象を付与していく機構にほかならない。それが象徴と異なるのは、その変換式が必ずしも読者一般に共有されない限定性を持つことで、その点で寓意的表現は作者と読者の間に成り立つ秘儀的な色合いを帯びることにもなる。つまりその秘儀を了解

している者には、表現の不透明さは直ちに解消される一方、その外側にいる者には、その表現が寓意であること自体が察知されないからである。西永氏の解釈は、氏自身がしばしば明言しているように、シャルル研究の大家であり、西永氏の記念碑的な訳業となつた『詩におけるルネ・シャルル』(法政大学出版局)の著者であるポール・ヴェーヌの解釈によるところもあるようだが、少なくとも西永氏が、シャルル詩の「神秘」を読み解く秘儀を手に行っていることは疑いないように思われる。ただ氏によつて施される数々の解釈はきわめて合理的・理性的な読み取りであるために、そこにはらまれた「神秘」が「神秘」として伝わりにくかつたという印象も抱かされた。

シャルルの詩は確かに難解だが、統辞法を逸脱して言葉がシニフィアンの跳梁に姿を変え、暴力的な意味への反逆も見出し難い。かいなでの読者としてシャルルの詩を瞥見すると、眼につくのは自然の喩が多用されることである。「ひまわりから種子をとるな、／お前の糸杉たちが苦しむだろう、／ごしきひわよ、再びとびたつて／お前の羊毛の巢にもどれ。／／お前が大空の小石でないのは／風がお前に構わないため、／田園の鳥よ、虹は／雛菊に併合される。」(窪田般弥訳、以下の引用も同じ)といった詩に典型的に現れている、自然界の表象を描きながら、同時に人間世界の様相を暗喩する手法は、多くの詩に見出される。それはシュールレアリスムとの出会い以前に、水に恵まれた南仏の豊かな自然のなかに育つたシャルルが、幼少期から意識することなく培った本来的な感性に発するものかもしれないが、シャルル自身が自然界の事象と人間界ないし精神界の事象を相互に映し取る機構を手にし、それを作動させつつ

詩作を遂行していったことは否定しえないように思われる。しかしその言語レベルでなされる自然と人間の交歓の様相が難解さを帯びていることは事実で、英仏が対独宣戦をおこなった一九三九年九月三日に作られた「高麗鶯」という詩を占める「高麗鶯は夜明けの首都に入った。／その鋭い剣のなき声は、悲しい寝室をしめた。」という最初の二行が、戦闘の開始を意味することは明瞭でありながら、「高麗鶯」に込められた含意は、翻訳を通してはとうてい捉えることができない。

もちろん西永氏も自然を素材としたシャルルの詩に言及しており、やはり南仏の自然への愛着がもたらした産物として位置づけられている。氏によれば、自然をうたった詩作品は、シャルルの詩世界においては比較的平明な色合いを持ち、解釈にはさほどの労を要さない対象であるとされる。西永氏がシャルルを特徴づける要素として重視するものは「痛み」であり、「自己」を「痛みに住まう」人間として自覚することが、シャルルを創作に導き、それによっても癒されるわけではない。「痛み」を抱えつづけて生きてきたとされる。「痛み」いいかえれば「受苦」のなかに身を起きつづけるのは、ある意味では詩人という人種を宿命づける条件でもあり、わが国における宮沢賢治や中原中也、みずから「痛み」という受苦を呼び込み、その感覚を味わうことを詩作の動力とした人間であった。その「痛み」は、多くの場合、合理的な説明を受け付けない先験性と宿命性を帯びているが、シャルルについても「形而上的とも言える恒常的な「痛み」という表現が充てられている。そこに東西の詩人という表現者を介在する要素を見出すこともできるが、いずれにしても「神秘」という否定神学を、合理的な叙述によって顕

在化しようとする西永氏の力業に圧倒されつつ、一巻を読み終えたことを明記しておきたいと思う。

(柴田勝二)